

明治維新と英傑

御維新

世直り

はじめに

明治維新は、幕藩体制が国内矛盾と外国による侵略の脅威が結びついて崩壊し、近代天皇制（中央集権統一国家と資本主義化）へと移行する転換点となった一大変革です。

明治維新の始まりは嘉永6年(1853)のペリー来航を、終期は明治27年(1894)の日清戦争とする説が最近では有力になっています。今回は嘉永6年(1853)のペリー来航から、慶応3年(1867)の大政奉還・王政復古の大号令（江戸幕府滅亡、明治新政府の樹立）までの資料を紹介します。

[資料リスト](#)

維新関連年表

年 月	出来事	備考
嘉永6年(1853)6月	ペリー来航	4隻来航
嘉永7年(安政元年/1854)1月	ペリー再来航	7隻来航
嘉永7年(安政元年/1854)3月	日米和親条約締結	日本初の近代的条約
安政5年(1858)6月	日米修好通商条約調印	通商条約
安政5年(1858)9月	安政の大獄始まる	井伊直弼が反対派を弾圧
安政7年(万延元年/1860)3月	桜田門外の変	大老井伊直弼の暗殺
万延元年(1860)10月	和宮降嫁勅許	公武合体
文久2年(1862)4月	島津久光、薩摩藩兵率い上洛	公武合体推進のため上洛
文久3年(1863)5月	長州藩、米仏蘭の艦船に砲撃	攘夷の決行
文久3年(1863)7月	薩英戦争	両者が接近する契機となる
文久3年(1863)8月	八月十八日の政変	薩摩藩が長州藩を京都から駆逐
元治元年(1864)7月	禁門の変	長州藩が会津藩排除のため挙兵
	第一次幕長戦争始まる	幕府軍が長州藩を撃退
元治元年(1864)8月	下関戦争	英米仏蘭の艦隊が下関砲撃
慶応2年(1866)1月	薩長同盟成立	政治的・軍事的な同盟
慶応2年(1866)6月	第二次幕長戦争始まる	幕府軍の敗退。
慶応3年(1867)10月	大政奉還	慶喜政権返上を明治天皇に奏上
慶応3年(1867)12月	王政復古の大号令	幕府を廃し新政府樹立を宣言
慶応4年(1868)1月	鳥羽・伏見の戦い	戊辰戦争の緒戦
慶応4年(1868)5月	戊辰戦争終結	榎本武揚の降伏

ペリー

アメリカ東インド艦隊司令長官のペリー(1794-1858)は、4隻の黒船を率いて嘉永6年6月3日浦賀沖に現れ、翌年日米和親条約の締結に成功しました。

ペリーの来日目的は、①日本沿岸で遭難などをしたアメリカ船乗員の生命・財産の保護、②それらの船舶への薪水・食糧の補給港を要望、③日米両国の貿易を勧告でした。

同年6月9日、久里浜の応接所で米国国書・全権委任状を授受し、来春大艦隊での渡来を表明して中国に引き上げます。

安政元年(1854)1月16日、7隻の黒船を率い再び来航したペリーは、小柴沖(横浜市金沢区沖)に投錨しました。羽田・品川沖を測量し、同2月10日横浜応接所で日米会談を開始し、同年3月3日に日本最初の近代的条約である日米和親条約を締結しました。

井伊直弼

文化12年(1815)~安政7年(1860)。11代藩主直中の14男として彦根城内で生まれました。天保2年(1831)長兄の藩主直亮から300俵を与えられ、城外の屋敷に移り住みました。自身で屋敷を「埋木舎」と名付け、文武諸芸の修行に励みました。弘化3年(1846)世子となり、嘉永3年(1850)に直亮が没したため13代藩主となりました。

嘉永6年(1853)のペリー来航の際、幕府の諮問に開国を主張して水戸の徳川斉昭と対立しました。翌安政元年のペリー再来航では、和平穏便論の直弼・佐倉藩主の堀田正睦と、打ち払いを主張する斉昭との間で激論をしています。その後斉昭との対立は激化していきます。

安政4年(1857)頃から政治問題化した13代将軍家定の継嗣について紀州慶福を推し、一橋慶喜を推す一橋派と対立しました。安政5年(1858)2月堀田正睦が日米修好通商条約調印の勅許のため上京しますが、勅許を得ることは出来ませんでした。しかし、正睦が江戸に戻った3日後に大老に就任し、同年6月19日に日米修好通商条約を調印させました。また、同月25日に紀州慶福(家茂)を将軍継嗣とする旨を表明しました。

安政5年(1858)9月安政の大獄を開始し、幕府の政策に反対する諸侯・有志・志士などを厳罰しました。大獄では水戸藩への処罰が最も厳しいこともあり、万延元年(1860)3月3日水戸浪士を中心とする18士に桜田門外で襲われて暗殺されました。

阿部正弘

文政2年(1819)10月16日~安政4年(1857)6月17日。天保7年(1836)福山藩主となり、天保14年(1843)25歳で老中に任命されました。弘化2年(1845)水野忠邦の罷免後、老中首座となりました。嘉永4年(1851)には鹿児島藩主に島津斉彬を就かせることで同藩の内紛を解決しました。嘉永6年(1853)6月のペリー来航に対処し、翌安政元年(1854)1月のペリー再来航の際は、米使応接掛に最大限の譲歩をするよう内密の指示を出したと言います。そして3月3日に日米和親条約の締結をみました。

正弘は米艦の来航後、有力諸侯と協調路線をとっています。当時諸藩声望の中心であった徳川斉昭を海防参与とし、島津斉彬と接近して斉彬の養女篤姫を将軍家定の夫人としました。

また、福井藩主松平慶永とも緊密な関係を保ち、井伊直弼とは堀田正睦を老中に再起用し、さらに首座も正睦に譲って摩擦の回避をはかりました。

また、永井尚志や岩瀬忠震などの人材を登用して幕政改革の推進力としています。安政 2 年(1855)2 月には講武場(のちの講武所)を、同年 7 月には長崎に海軍伝習所を開設して洋式の兵術を導入しました。さらに洋学所(のちの蕃書調所・開成所)を設けて西洋文化を吸収させています。安政 4 年(1857)39 歳の若さで亡くなりました。

松平容保

天保 6 年(1835)～明治 26 年(1893)、美濃国高須藩主松平義建の 6 男に生まれました。弘化 3 年(1846)会津藩主容敬の養子となり、嘉永 5 年(1852)会津藩 23 万石を襲封しました。

文久 2 年(1862)閏 8 月新設の京都守護職に任命され、以後所司代の上に立って京都の治安維持に努め、激化する尊王攘夷の動きに対処しましたが、新撰組を配下において尊王攘夷派から敵視されました。文久 3 年(1863)1 月には初めて参内し、以後孝明天皇の絶大な信任を得ました。容保は薩摩藩と組んで同年に 8 月 18 日の政変を起こし、長州藩を京都から駆逐しました。元治元年(1864)6 月、新撰組の池田屋襲撃が契機となって、7 月に禁門の変が起こり、会津藩兵は蛤門の激戦で薩摩・桑名藩兵の来援で長州藩を撃退しました。第二次長州戦争では徳川慶喜が休戦に持ち込んだことを非難し、将軍家茂病死に伴い慶喜の将軍就任に尽力しました。慶応 3 年(1867)10 月の大政奉還には不満を表明し、同年 12 月の王政復古で京都守護職を免ぜられました。明治元年(1868)1 月、鳥羽・伏見の戦いで官位を奪われ、同年 2 月致仕し会津若松に帰りました。同年 8 月新政府軍が会津に進攻し、同年 9 月に降伏しました。

徳川慶喜

天保 8 年(1837)9 月 29 日～大正 2 年(1913)11 月 22 日。水戸藩主徳川斉昭の 7 男として江戸水戸藩邸に生まれました。生後 7 か月で水戸に送られ、11 歳まで同地で教育を受けました。弘化 4 年(1847)一橋家を相続しました。その後、将軍家定の継嗣を決める際、その候補者として紀州の徳川慶福と慶喜の名が挙げられました。将軍継嗣問題は、安政 5 年(1858)の日米修好通商条約問題と絡み合い複雑化しました。

安政 5 年(1858)6 月条約調印を断行した大老井伊直弼に対し、父斉昭・兄慶篤・松平慶永・慶喜らは不時登城して大老の条約調印を面責しました。14 代将軍は慶福に決まり名を家茂と改めました。一方慶喜は不時登城を譴責されて翌 6 年(1859)8 月に隠居・慎を命じられ、以後約 3 年間政局外に置かれました。

文久 2 年(1862)7 月一橋家を再相続し、将軍後見職になりました。同年 12 月将軍上洛の先駆として上京し、朝幕間を奔走しました。その後江戸に帰りましたが、文久 3 年(1863)八月十八日の政変で長州藩をはじめとする尊攘派が一掃されると同年 10 月再び入京しました。元治元年(1864)7 月の禁門の変では御所を守備し、慶応元年(1865)10 月には安政 5 カ国条約の勅許を得ることに成功しました。慶応 2 年(1866)6 月には将軍に代わって第二次征長の勅許を得ましたが、翌月将軍家茂は大坂城で病死したため、10 月に将軍に叙されました。慶応 3 年(1867)10 月 14 日、土佐藩の建言に基づいて大政奉還を上表し、なお国政の主導権を握る

うとしましたが、同年12月9日「王政復古」の号令、明治元年(1868)1月の鳥羽・伏見の戦いによって事態は一変し、慶喜は海路江戸に帰りました。その後は恭順専一の態度をとり、同年2月上野寛永寺で閉居謹慎しました。明治2年(1869)9月謹慎を解かれ、以後約30年にわたり駿府に閉居し、趣味一途に生きました。

岩倉具視

文政8年(1825)9月15日～明治16年(1883)7月20日。前権中納言堀河康親の第2子として誕生しました。天保9年(1838)岩倉具慶の嗣となり具視と名乗りました。安政元年(1854)孝明天皇の侍従に、ついで近習になりました。

安政5年(1858)2月に、日米修好通商条約調印の勅許のため老中堀田正睦が上京すると、勅許阻止を図って公家88人の列参を画策して堀田を窮地に追い込みました。また、和宮降嫁問題が起こると公武合体による朝廷の権力回復のため孝明天皇を動かして推進しました。しかし、和宮降嫁推進が尊攘派から糾弾され、文久2年(1862)8月辞官落飾を命じられ、慶応3年(1867)3月まで追放されました。

慶応3年(1867)10月に慶喜が大政奉還を行い、同年12月9日王政復古の号令の際に、岩倉は王政復古派の公家と共に画策し、大久保利通と実現の手順を謀議しました。また、玉松操(文化7年～明治5年。国学者、岩倉具視の右腕とも言われる)に王政復古の新政構想の立案をさせています。また、王政復古挙行日夜の小御所会議で、慶喜擁護論の高知藩の山内容堂を抑えて慶喜処分を決しました。岩倉はこの日新政府の重職に就き、明治元年(1868)の鳥羽・伏見の戦いの後は、三条実美とともに新政府の中心人物になりました。

西郷隆盛

文政10年(1827)12月7日～明治10年(1877)10月24日。鹿児島に生まれました。安政元年(1854)1月藩主島津斉彬の御小姓になります。同4年(1857)斉彬の意を受けて、將軍家定の継嗣に一橋慶喜を擁立するため奔走しました。同5年(1858)安政の大獄が始まると、尊王攘夷派の僧月照を保護するため鹿児島に帰りましたが藩内の状況では不可能で、同年月照と共に鹿児島湾に投身し、西郷のみ蘇生しました。3年の幽囚生活ののち文久2年(1862)に召還されましたが、藩主の父である島津久光から主命に従わないとの罪で流罪に処せられ、元治元年(1864)召還されました。同年7月の禁門の変では長州軍と戦い勝利しています。慶応2年(1866)1月には坂本竜馬の仲介で、長州藩の木戸孝允との間で討幕の薩長同盟を結びました。慶応3年(1867)6月土佐藩の後藤象二郎らと薩土盟約を交わしました。同年(1867)10月には長州藩・芸州藩の討幕派との間に討幕挙兵の盟約を結ぶとともに、大久保利通と共に岩倉具視と結んで討幕の詔勅降下を謀りました。

こうして慶応3年(1867)10月14日將軍徳川慶喜の大政奉還の上表が朝廷に出された前日、薩摩藩主宛ての討幕の密勅が出ました。同年12月9日の王政復古の号令が出た際は、諸藩兵を指揮して宮門警備にあたり、大久保利通は小御所会議での公卿・大名を監視・威圧しました。幕府への武力行使をもくろむ西郷と大久保は、幕府側を挑発して明治元年(1868)1月鳥羽・伏見の戦いを引き起こしました。東征軍を指揮した西郷は、同年(1868)3月幕府陸軍

総裁勝海舟と会談し、江戸城無血開城を実現しました。王政復古の第一の功臣と言われた西郷ですが、その後も明治4年(1871)7月の廃藩置県の断行に協力し、学制・徴兵制・地租改正の改革着手の最高責任者になっています。明治10年(1877)西郷を盟主として起こった土族反乱である西南戦争で負傷し自刃しました。

吉田松陰

天保元年(1830)8月4日～安政6年(1859)10月27日。長州藩士杉常道(家禄26石)の次男として生まれ、5歳の時山鹿流兵学師範である長州藩士の叔父吉田賢良(家禄56石余)の仮養子となり、翌年吉田家を継ぎました。松陰の短い生涯は5期に分けられます。

第1期は出生から山鹿流兵学師範になるまでで、実父から厳格な教育を受け、11歳の時には藩主の前で『武教全書』を講じました。また、藩士山田宇右衛門などから兵学の知識のほか世界情勢への眼を開かされました。

第2期は嘉永3年(1850)から同6年(1853)までの諸国遊歴の時期で、嘉永3年(1850)には平戸・長崎などを遊歴し、嘉永4年(1851)3月には藩主の東行に従い江戸に遊学しました。同5年(1852)には2か月にわたり東北を巡り、同6年(1853)には再度の江戸遊学中にペリー来航に遭遇しました。佐久間象山の下で砲術と蘭学を学び、海外視察のため密航を企てました。長崎にロシアの軍艦が来航と聞くと長崎に赴き、安政元年(1854)のペリー再来航に際しては、3月27日夜下田において密航を懇願しましたが米側から拒否されています。翌日自首して江戸の獄舎に入り、のち自藩幽閉の処分となりました。

第3期は獄囚生活と幽居生活で、約1年の獄囚生活の後実家杉家の預かりとなり、以後2年半に渡り松下村塾で高杉晋作・伊藤博文などを教育しました。第4期は安政5年(1858)日米修好通商条約の調印問題を巡って国内が混乱した時塾生と対立した時期で、藩は松陰の過激な言動に際して「學術不純にして人心を動揺せしむる」との理由から、安政5年(1858)12月再び獄に収監しました。第5期は安政6年(1859)5月江戸に護送されてから同年10月に処刑されるまでです。

坂本竜馬

天保6年(1835)11月15日～慶応3年(1867)11月15日。土佐藩の町人郷士の家に生まれました。竜馬は通称で、直陰のち直柔と名乗り脱藩後は才谷梅太郎などの変名を使用しました。

嘉永6年(1853)に江戸に出て北辰一刀流千葉定吉の門に入りました。江戸滞在中にペリー来航に遭遇して攘夷思想の影響を受けています。安政元年(1854)に帰国後、武市瑞山(土佐勤王党の盟主)と交流を深め、文久元年(1861)武市が土佐勤王党を結成すると竜馬も加盟しました。

その後、薩摩藩の率兵上京に呼応する西国志士の拳兵計画が伝わると同志の脱藩が相次ぎ、竜馬も文久2年(1862)3月に脱藩しましたが、拳兵計画には参加せず夏過ぎに江戸に赴きました。その後松平春嶽に接し、さらに勝海舟の門に入りました。勝の下で幕府の近代海軍創設計画に参加し、脱藩も許されました。

文久3年(1863)4月幕府が神戸海軍操練所の建設を決定すると、勝の右腕となって活躍し

ました。しかし、土佐藩が勤王党弾圧を強めると同年12月に再度脱藩しました。

翌元治元年(1864)10月勝が江戸に召喚されると、操練所に集まった竜馬以下は薩摩藩に預けられ、慶応元年(1865)4月鹿児島に赴きました。竜馬は薩長の関係を深め、慶応2年(1866)1月22日(21日とも)、京都薩摩藩邸で竜馬の仲介による薩長同盟を成立させました。

同盟成立の翌日、京都伏見の寺田屋で幕吏に襲撃されましたが難を逃れ、その後は薩長土三藩連合を画策し、慶応3年(1867)1月土佐藩の後藤象二郎と会談しました。土佐藩は竜馬の罪を許し、同年4月海援隊長に任命しました。同年6月には竜馬の国家構想である「船中八策」を後藤に提示し、後藤はこの構想に基づいて大政奉還を実現させています。同年11月15日京都の近江屋で幕府見廻組に襲撃されて亡くなりました。

高杉晋作

天保10年(1839)8月20日～慶応3年(1867)4月14日。萩藩大組士高杉春樹(200石)の嫡子として生まれました。安政4年(1857)藩校明倫館の入舎生になり、この年松下村塾に入門しました。翌5年(1858)昌平黌に入学し同6年(1859)帰国しました。

万延元年(1860)12月明倫館舎長となり、文久元年(1861)藩主から海外視察の許可を得て、翌2年(1862)幕府の千歳丸に乗船、同年5月から7月にかけて上海に滞在しました。上海では半植民地化の現状を見て日本の危機を実感しました。

文久3年(1863)5月10日長州藩の外国船攻撃を契機に、米・仏艦の反撃で情勢が緊迫し、同年6月6日に藩主から下関の防御を任された晋作は、翌7日「有志」による奇兵隊を創設しました。この奇兵隊は以後長州討幕派の軍事的基盤になっています。

元治元年(1864)京都進発を巡って来島又兵衛と激論して脱藩し、その罪で投獄されました。その後許されて四国連合艦隊との講和にあたりますが、藩内の反対派と対立が深くなり北九州に脱走、その後下関に戻ると同年12月から翌慶応元年(1865)初頭にかけて下関に拳兵(功山寺決起)し、反対派から藩政を奪取しました。その後、長州藩では藩を挙げて第二次征長軍と対決姿勢をとります。慶応元年(1865)10月には坂本竜馬らと下関で第二次征長軍への対応を協議しました。慶応2年(1866)海軍総督になって幕府の軍艦を周防灘で襲うとともに、小倉領を攻撃し占領しました。翌慶応3年(1867)4月下関で死去しました。

【参考文献】

- 『国史大辞典』1 井伊直弼(吉田常吉)、阿部正弘(石井孝)、岩倉具視(大久保利謙)
吉川弘文館 昭和54年
- 『国史大辞典』6 西郷隆盛(遠山茂樹)、坂本竜馬(池田敬正) 吉川弘文館 昭和60年
- 『国史大辞典』9 高杉晋作(田中彰) 吉川弘文館 昭和63年
- 『国史大辞典』10 徳川慶喜(小西四郎) 吉川弘文館 平成元年
- 『国史大辞典』12 ハーリー(秋本益利) 吉川弘文館 平成3年
- 『国史大辞典』13 松平容保(吉田常吉)、明治維新(田中彰) 吉川弘文館 平成4年
- 『国史大辞典』14 吉田松陰(本郷隆盛) 吉川弘文館 平成5年

